

---

# 日常回帰のアナザーヘブン

おるにょん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

日常帰りのアナザーヘブン

### 【Nコード】

N0039Y

### 【作者名】

おるによん

### 【あらすじ】

Steins;Gateの二次創作小説になります。ゲーム版のトゥルーエンドの後、つまりシュタインズゲートの世界線に到達した後の話。オカリンと紅莉栖が再会した次の日から物語は始まります。（なので当然内容はネタバレ注意になってしまいますが・・・）今回は基本的にオカリンを探し当てた紅莉栖が、一度、アメリカに戻るまでを書く予定です。

楽しんで頂ければ良いのですが・・・。

※最近PIXIVにも投稿しはじめました。

## ☆★ Chapter 1 ☆★

ここは別に約束された天国って訳じゃない。

ただ、未来が確定されていない・・・つまりまだ誰にも観測されていない世界線。

それだけだ。

ハッピーエンドが約束されている訳でもないし、バッドエンドに収束することが運命づけられているわけでもない。

いや、もしかしたらそうなのかもしれないが、それは誰にもまだわからない。

そんな世界なのだ。

俺、岡部倫太郎と、クリスティーナ、牧瀬紅莉栖は、昨日、劇的な再会を果たし、これまでの苦勞が報われたような一見ハッピーエンドを経験したの、だが。

それで人生が終わるわけじゃない。

その後も続いていく以上、それはもう通過点でしかない。

人生最後の日になれば、全てはわからないのかもしれない。もしかしたら、最後の日を迎えてもそれは結局わからないのかもしれないが・・・。

メイクイーンニャンニャンで俺は、クリスティーナを待っていた。再会を果たしたばかりのシュタインズゲートの世界線の紅莉栖。

昨日は、あまりの突然の展開に俺たちは二人共冷静では居られなくなってしまう、お互いの連絡先を教え合って、取り敢えずは別れたのだ。

明日、落ち着いたら喫茶店ででもお話しよう、と約束して。

俺としてはその時は少し寂しい気持ちもあったが、その別れた直後から、紅莉栖が頻繁にメールをくれたお陰で、また紅莉栖が俺の日常に帰ってきてくれたような実感は取り戻しつつあった。

まあ、まさか、出会った瞬間から感動の抱擁なんて展開は、期待しても居なかったし。

何より、またこの世界線で紅莉栖と出会えて、そして彼女も俺を覚えていてくれる。

そして、この俺にまだ興味を持ってくれたこと、それだけで、どれだけ奇跡と言ってもいいことなのかは、もうこの世界の紅莉栖ともう一度会って仲良くなるなんてことを諦めかけていた俺からすれば、改めて言うまでもないことだった。

そんなことをつらつら思い出しながら、メイクイーンニャンニャンの店内を何とは無しに見回した。

まゆりは今日は遅番と言っていた。

今は13時。

今頃はまだラボで次のコスプレ衣装の策定に忙しくしていることだろう。

秋の新作アニメのキャラがどうか、斬新な創作意欲を湧き立たせる衣装が目白押しだとか、興奮気味に話してたな。

フェイリスは、今日は非番だそうだ。

なんでも、雷ネットアクセスバトラーズのコンベンションに行ったらしい。

そういえば少しずつ自分のやりたいことをやっていくんだって言うてたしな。

アイツならすぐにそっちの方でも有名人になるだろう。

何たって別の世界線じゃ既に全国チャンピオンになってしまっているほどの素養なんだから。

それはもう成功が約束された道だと言ってもいいのかもしれない。

そんな訳で、フェイリスのスケジュールを逐一把握し、当然、今日はいないことを知っているダルもメイクイーンには来るはずがなく、俺は一人で退屈にクリスティーナの到着を待っていたという訳だ。

そろそろ・・・か。

携帯で時間を確かめると約束の13時を5分ほど過ぎたところだった。

窓際の席から外を眺めていると、小走りで建物に駆け込んでくる紅莉栖が見えた。

どうやら来たようだな。

俺は、嬉しい気持ちが高き上がるのを感じながら、出入り口にあたる方向を凝視した。

(to be continued...)

## ☆★ Chapter 2 ☆★

昨日から、心臓がおかしくなっちゃったみたいにな、ちょっとしたことで早鐘のように打ってしまっ困る。

そう、昨日。

私は探していた人を見つけた。

岡部倫太郎と名乗ったその人は、なんだか懐かしい感じがした。

不思議だ。

出で立ちも、立ち振る舞いも、言動も明らかに怪しい。

何を言い出すかさっぱりわからない。

でも……。

悪いやつじゃない。

さしたる理由もなく、そう思ってしまう。

そして、彼の一挙手一投足に私の心は過剰に反応してしまう。

自分でも訳がわからない感情が急に溢れ出て来て、逆らえなくなってしまう。

昨日は、彼と出会って、少し話をした。

彼は、いきなり何だか分けのわからないことを急に言い出し、どうしてそんなことを急に言い出すのかしら……と思う間もなく、私は猛烈に反論していた。

これには私が一番びっくりした。

第一、自分が彼に言っていること自体が私自身が意味不明……という、知らない人が見たら黄色い救急車を呼ばれてしまいそうな事態だったのだ。

気が動転して、恥ずかしくてそこから逃げ出したくなってしまいそんな気持ちに駆られたのだけれども、それ以上にその時の彼の表情が興味深くて、私は思わずそれに見入ってしまったていた。

彼は、まるで泣きたいような、そして笑いたいような、そして感情の全てを堪えるような表情を見せたのだ。

それは7月のあの日、「俺は・・・お前を・・・助ける」そう言った時の彼の思いつめた表情を思い起こさせ、私をその場に踏みとどまらせた。

その後、その感情の洪水のようなものから立ち直った彼は、どうやらいつもの状態に戻ったらしく、何だか懐から大切そうにピンバッジを取り出すと、私に渡して満足そうに頷いた。

一人悦に入っている感じ。

そういう彼は、なんだかいつも芝居がかっているような感じで、体中から怪しさが爆発するようなオーラを漂わせていた。

いつもの私ならそんな奴に関わりあうことなんてゴメンだと思うはずなのに。

何故か、その時の私の心の中は、そんな彼を見て妙に居心地の良さすら感じてしまっただけ・・・。

そうそう・・・こういうヤツなのよね。

なんて、思っただけで安らいでしまう自分に驚いてしまっていた。

私の中に、もう一人、私がいる・・・。

そんな感じ。

その『知っている私』に、知らない私は抗う術を持たない。

何も知らないままだったとしたら、そんな自分自身に私は恐怖を抱いてしまったかもしれない。

すぐにでも精神科医の元に行ってカウンセリングの予約を取ったか



もしれない。

でも、そうはならなかった。

あの日・・・そう、私が血まみれでラジ館内に倒れていた7月28日以来、私は色々な自分を夢で見てきたから。

そして、目の前の彼、岡部倫太郎もその夢に登場していた。

目の前の彼と寸分違わぬ怪しい出で立ち、怪しい言動で。

しかし、むしろその『彼らしさ』こそが、私に今起こっているこの『おかしい出来事』に対する興味を抱かせ、その場に踏みとどまらせたのだと思う。

そこはそれ、彼の大したところなのかもしれない。

だって、普通できないもの。

初対面のそれも女の子を前にして、あれほどの傍若無人、怪しさ爆発のオンパレードは。

だいたい、私は、性格的に好奇心を抱いた対象は徹底的に追求しないと気が済まない。

だから、この岡部倫太郎という突然私の目の前に現れて、私の心をかき乱す輩を徹底的に追求して研究してやらないと気が済まない。短い間に、どうもそんな気持ちにさせられてしまったらしいのだ。

なんだか、変なことに首を突っ込んでしまったような気もするんだけど、それは私自身が自分でもわからないところで自ら望んでいることのような、気も、した。

(to be continued...)

## ★ Chapter 3 ★

俺の前に紅莉栖が立っていた。  
昨日の事は夢じゃない。

「久しぶりだな。クリスティーナ」  
そう声をかけた。

「岡部さんとは昨日会ったばかりだと思いますけど」

柔らかな表情で俺の前に立った紅莉栖は、眉をひそめてそう言った。

「それからクリスティーナっていうの止めてもらえませんか？」

「どうしてだ？」

「どうしてって・・・私、あなたにそう呼ばれると、どうしてかわからないんだけどイラッとしてしまうみたいで・・・」

彼女は律儀にそう答えた。

そうだろう。

うんうん。

だが、今のところ俺と、このシュタインズゲート世界線の紅莉栖を繋いでくれている糸は、この固有名詞だけなのだよ。

なので、俺は更に呼びかけた。

「じゃあ・・・」

「？」

「クリスティーナ」

「！」

「クリスティーナ・・・」

「！！」

「クリスティーッナッ」

「やめい！」

彼女は思わず叫んだ。

「どーしてなのだぁ？ 俺はただ君を呼びたい名称で呼んでいるだけなのだよ。それなのに、その過剰な反応はどこからやってくるんだろうなぁ。フーッハハハハハ！」

彼女に嫌われることは正直怖かったが、それ以上に今は俺たちがどれだけ、そして何をもってして繋がっているのか、それを確かめなかった。

精一杯の強がり、紅莉栖を挑発した。  
だが。

「・・・わからないのよ」

彼女は俺の目の前の椅子に静かに座ると、ポツリと呟いた。

「すまん」

俺からすれば、てっきりいつもの調子でからかって、彼女の本心を燦り出してやろうと思ったのだが・・・少し早計過ぎた。

ここでの俺達はまだ出会ったばかりに等しい。

ちよっとやり過ぎたか。

「7月28日のことを覚えていますか？」

紅莉栖はおもむろに聞いてきた。

「ラジ館でのことか？」

「そうです。あなたは何度も執拗に私の前に現れた。まるで、先回りするかのように、私の行動を見通しているかのように」  
そうだったな。

確かにある程度先回りしたのは事実だ。

「そして、私を助けてくれた・・・」

ちよっとドキリとする。

確かに俺は牧瀬紅莉栖を死の運命から助けた。

だが、俺が可能性事象的な意味で彼女を助けたことを、彼女自身は知らないはずなのだ。

それどころか、手負いだったとはいえ、最後には紅莉栖をスタンガンで気絶させたのは俺であり、逆に恨まれてもいいくらいなのだが。

「あの時、私の父はコンプレックスのあまり正気を失っていた。あの人は、時々ああなるのよ。自分の思い通りに物事が進まないのを許せない。そして、ヒステリーのような症状に陥って相手を力任せに否定してしまう・・・」

まあ、そういうヤツだろうな。あいつは。

「私もまさか父の劣等感の対象が自分だなんて思ったこともなくて・・・。おかしいわよね・・・ずっと私が父を目指してきたのに・・・」

うつむいたままそう話した紅莉栖は顔を上げた。

「だから、あのままだったらパパに刺されていたのは私のほうだったのかもしれない。あなたもそう思ってパパを挑発してくれたんでしょう？」

俺は、何も言わなかった。

あの状況で大した観察力だと思う。

そして、俺はそのあとお前を・・・少し良心が疼いた。

「だが、そのあとのことは・・・」

しかし紅莉栖は首を横に振った。

「ううん。そのあとのことについては私は全く覚えていないのよ」

「そう、なのか」

「ええ。知らない間に気を失ってしまっていて、気が付いたら私は血まみれの中で倒れていた。そして私は無傷だった。だから私の周りに大量に流れていた血は貴方のものだと思って、すぐに警察を呼んだんだけど・・・」

そうか・・・事故にあった直前の記憶が飛んでしまうようなものか。だから、紅莉栖は俺にスタンガンで倒されたことを覚えていない。

「でも、貴方はその時からずっと行方不明だった。すごい怪我をしていたはずなのに」  
う・・・。

その辺りは突っ込まれても説明が難しい。

「私は助けてくれた貴方を探して、現場を捜査した警察官にも聞いてみたんだけど、血は屋上まで続いている・・・そこまでで途切れていたって」

紅莉栖は某少年探偵のような表情で俺を見つめた。

一発ネタで一か八か包囲網脱却を試みる。

「正に『ねらー腐女子の名にかけてっ!』って感じだな、クリステイーナ」

思惑通り、目の前の紅莉栖は真っ赤になって叫んだ。

「わ、私はねらーじゃないし、腐女子じゃないっ!」

いきなり立ち上がって店内に響く大声を挙げる紅莉栖。

店内のあちこちから失笑が漏れた。

すまん、クリステイーナよ。

これも、最高機密を守るためだ。

お前の尊い犠牲は決して無駄にはしない。

エル・プサイ・コングルウ。

(to be continued...)

## ☆★ Chapter 4 ☆★

このヒトはいつたいなんなのだろう・・・！

私はひどく動悸のする胸を押さえて、呼吸を整えると自分が立ち上がっていたことに気が付き、バツが悪く座った。

どうしてこの人は、私が@チャンネル常習者・・・あんまり自分じや言いたくないけど、いわゆる『ねらー』だっていうのを知ってるの？

学友も、教授も、パパも、ママも、その事実は知らないっていうのに。

なんて考えていると目の前の男はニヤリと笑って・・・。

「ふふふふっ・・・はははははっ・・・ふうっはっはっはっは！」  
いや、ニヤリどころではなかった。

くそっ、なんだかその高笑い、ほんっとムカつくな。

「クリスティーナよ。語るに落ちたな。それでは、まるでねらーや腐女子の意味を既に知っているかのような反応ではないか」  
うっ・・・そうだった。

・・・って・・・こうやって詰められるのが、なんだか、初めてじゃないような気がするのよね。

あの日以来、私は、いつたい、どうしちやったっていうんだろう。  
そうあの日・・・7月28日。

~~~~~  
~~~~~

あの時、気を失っていた私は血だまりの中で目を覚ました。  
血はペリペリと剥がれるほど固まり初めていて、気持ち悪かった。  
リノリウムの床と、血の鉄分、それから生物的な据えたにおいが混ざったような、むせ返る空気……。

私は吐き気を堪えながら起き上がると、この血の主のことを考えた。  
これはダミーじゃない。

明らかな本物の血。

それもそのはず、さっきまでパパと立ち回りを演じていた名も知らない男の人は、私の目の前でパパにナイフで刺されたのだ。

物凄い勢いで血が出ていたのを思い出す。

それでも、彼は逃げ出すことなくその場に踏みとどまって……。  
なんだろう。

その男の人の地の底から振り絞るような悲鳴が、耳の中に残っているような――。

でも、彼は刺された時にもそんな声は挙げなかった。

そんなことを思い返しながら、血の痕が、点々というよりもっと色濃く、引きずられていくように部屋の外へと続いているのを見つめた。

死んではいない？

でも、あの傷でどうやって？

私はどうして気を失ってしまったんだろう？

色々なことが浮かんだが、頭を落ち着けるとまずは警察を呼んだ。  
それは実の父を告発することを意味するのだが、もうためらいはなかった。

色々問題がある人だったのは承知の上だったが、そして、私がそのコンプレックスの元になっていたというのは本当にびっくりしたけ

ど、それにしても本当に人を刺してしまうなんて！  
なんという弱さ！

ずっと、子供の頃から追いかけていたパパは、あんな人じゃなかったはずなのに……。

警察が来るまでの間もいろいろなことを考えた。

父に立ちふさがった名前も知らない謎の男の人。

執念すら感じるその彼の叫びと立ち回り。

変わってしまった父親の下卑た笑い。

ただ、言えることは、もう私はあの錆びた中年科学者を、永遠に父親とは思えなくなってしまった……と言うことだ。

~~~~~

「どうして……」

そんなことを思い出すと、私は、目の前の彼……昨日、岡部倫太郎と私に名乗った彼に訊かずにはいられなかった。

「どうして、あんな目にあってまで私を助けてくれたんですか？」

それも、あの時は完全初対面の私を、である。

彼は即答した。

「それは、クリスティーナ。お前が私の助手で、大切な俺達の仲間、ラボメンだからだ」

ラボメン？

私は日本語としてはあまり聞き慣れない言葉を聞いて少し困ったが、すぐに英語の側に思い当たるものを見つけ納得する。

……ああ、LABORATORY MEMBERか。



そういえば、夢で見た光景でもそのラボとか呼んでいる汚い一室があったような・・・。

あの7月28日以来、私はまるで毎日同じシリーズのドラマでも見るかのように、似たような設定の夢を見続けた。

完全な続き物？　というところでもなくて、毎回少しずつ設定が違っていったような気もする。いつも変わらないのは、秋葉原が舞台であることと、この目の前の男性が私の一番近くの場所に出てくるということだ。

なんの予兆なのだろう、だなんて、運命の出会いを夢見て、およそ科学者らしくない妄想を膨らませたりしていたのだが。

それでも、その彼と実際に秋葉原の路上で偶然ばったり出会ってしまふ、だなんて非常識な展開は、望みこそすれ信じてはいなかった・・・と思う。

そして、その夢に頻繁に出てきたラボ（研究室）とは名ばかりの汚い一室が、もしかして本当にある？

私は興味を惹かれた。

(to be continued...)

## ☆★ Chapter 5 ☆★

「ラボメンって・・・私はいつからあなたのところのラボラトリーメンバーになったんですか!」

俺の言葉を聞いて、案の定食って掛かってくる紅莉栖。

「その記憶は、遠い宇宙の果て、または前世にまで遡る・・・」

「真面目に聞いているんです!」

いや・・・真面目に答えているんだがな。

紅莉栖は、「だいたいなんで私があなたの助手になるのよ・・・」などにごによごによ言っていたかと思うと、しばらくして今度は意外なことを聞いてきた。

「その・・・ラボとかいう所は・・・この秋葉原にあるんですか?」

「そうだが」

ラボに興味があるのか。

そして、その後に続く言葉は更に意外な言葉だった。

「そこを見せてもらうことは・・・できますか?」

まさか、紅莉栖の方からラボに連れて行って欲しい、という話が出てくるとはな。

「それは、かまわんが、見るほどの観光名所はないぞ」

俺にとっては、正に渡りに船な話なのだが、あまりのご都合展開に、思わず心にも無いことを言ってしまう。

その俺の言葉に小さく答えた彼女の呟きを、俺は聞き逃さなかった。  
「・・・でしょうね」

まるで知っているかのような口ぶりだな。

まさか、とは思うが確かめてみる価値はある。

「・・・知っているのか？」

さりげなく、そう聞いてみる。

「知ってるわけ・・・ない、じゃないですか」

やや当惑気味にそう答える紅莉栖。

「だが・・・知っているんだな」

「会話になってない！」

「俺。鳳凰院凶真とまともな会話をしようとするほうが間違っているのだ」

「だから、そこで偽名を使ってごまかさないで下さい」

「偽名ではない、真名だと昨日も言ったではないか」

そう、昨日も、最初名前を訊かれて『鳳凰院凶真』と答えた俺に紅莉栖は即座にツッコミを入れていたのだったな。

~~~~~

「お名前を教えて頂いてもいいですか？」

「鳳凰院凶真だ」

「以前に会った時も、そんなことを言っていましたね、本当の名前を教えて下さい」

「それこそ・・・鳳凰院・・・凶真っ!!」

「じゃあ、世を忍ぶ仮の名は？」

「・・・岡部倫太郎」

「最初からそう言えばいいのよ・・・」

~~~~~

「もう・・・！」

紅莉栖は目の前で複雑な表情をしながら、何かを迷っている感じである。

俺はかまわず続けた。

「クリスティーナよ。どこでその機密情報を入手したのだ」

「どこが機密情報なんですか」

「まさか・・・機関からかっ！」

「あなた、話をちゃんと聞きなさいって、通信簿に書かれてたでしょう」

「うむ。書かれていた」

「・・・」

紅莉栖はため息をついて呆れた素振りを見せた後、やがてポツリとこう言った。

「夢で見たような気がするだけです・・・その部屋を」

リーディングシュタイナー！

俺の心は飛び跳ねた。

ついに尻尾をつかんだぞ。

運命よっ。

(to be continued...)

## ☆★ Chapter 6 ☆★

7月28日・・・血溜まりの中で目を覚まして以来、私の日常はすっかり変わってしまったような気がする。

外側の現実は何も変わらない。

けれども、私の内側はまったく違ってしまっていた。

そして、内側が変われば現実解釈が変わり、世界はまるで違って見えてしまうのだ。

いったい、私の内側で何が起こったのか。

それは自分でもわからない。

あの日以来、私は父という存在を永遠に失った。

もう私は「あの人」を父親だとは思えなくなってしまった。

そして、その代わりなのか、何なのかはわからないが、『何か』が私に付きまとうようになった・・・そんな感じがする。

それからというもの、何かのきっかけでよく白昼夢のような状態になるようになった。

夜になると毎晩、似たような設定の夢を見るようになった。

秋葉原が舞台で、おかしな仲間が出てきて、私はその仲間達と『何か』を作っているのだ。

その夢は、この現実に恐ろしく近い体験に思えた。

それはもう目覚めた後怖くなるくらいに。

いつか、この夢に私の現実は入れ替わられてしまうのではないかと恐れたこともあった。

そして、私はこの現実の秋葉原を歩きながら、その夢の断片を無意識のうちに探し歩くようになったのだ。

それはすごく近くにあるようで、とても遠い世界のような気がした。現実の皮一枚隔てた、もう一つの現実。毎日毎日、夢を繰り返し見ている間に、私はそんな風に考えるようになっていた。

記憶とは情報であり、人間にとってその情報とは判断基準と言ってもいいだろう。

人間はその情報の蓄積によって判断し、自分の生きていく経路を決めていく。

それを『人格』と呼ぶのだとしたら、この現実とは違うところからの継続した経験という記憶、つまり情報を得るようになることは、自分の中にもう一つの『別の人格』を形成するに等しいのだ。

そして、その人格はその『もう一つの現実』の経験からの情報が蓄積されればされるほど、自分の中で存在感を増していく。

私は、その未知の人格を恐れていたが、未知の恐れは『知る』ことによって解消されることを、科学の世界に携わることによって確信していた。

それ故、私は知りたかったのだ。

そのもうひとつの現実が私にとって何を意味するのか。

そして、そのもう一つの人格が私にとって何なのか。

いったい何を意味しているのか、を。

そして、その象徴的存在が、目の前の彼だった。

彼に出会うことで、その謎は解き明かされるのではないか・・・そう私は理由もなく期待していたのだ。

~~~~~

「どんな夢だったのだ？」

彼、岡部は聞いてきた。

なんと言って説明すればいいというのだろう。

そんな私の妄想を彼に話しても、とてもわかってもらえとは思えない。

しかし、彼ならば私の疑問に全て答えてくれるのではないか・・・  
そう都合よく考えてしまう自分を否定できない。

「どんなって・・・毎日、色々なことが起こるから一言では・・・」  
私は言い淀んだ。

「ふむ。一度ではないのだな」

彼は訳知り顔で頷いた。

「同じような夢をずっと連続して見たことってありますか？」  
私はそう聞いてみた。

「無いな。夢とは普通そういう、番組を選んで見ることできるようなものではないだろう」

「全く同じ夢というわけではないのよ。同じような人達がいて、同じような場所で少しずつ違うことをしている・・・」

そうとしか言い用がない。

だが、彼は更に踏み込んできた。

「そこにラボが？」

「うん・・・たぶん。そしていつもあなたが出てくるのよ。そして私たちは一緒に何かを作っている・・・」

「何を作っているのだ？」

「それは・・・その・・・夢だから・・・」

何かタイムマシンのようなものを作っていたような気がする。

でも、私は仮にも科学者の端くれである。

夢とはいえ、そんなことを大真面目に言うのは恥ずかしい感じがして気が引けた。

きつと、7月28日に父親とタイムマシンに関する論文で色々あって、そしてその近くにこの岡部というヒトがいたから、こんな夢を見るんだ。

そう思っていた。

だいたい夢って普通そういうご都合主義なものだし、現実で印象に残った色々なものをツギハギするように、夢のシナリオは作られるものなのだから。

けれども、彼、岡部倫太郎と名乗る私にとっては未だ謎の男の人は、その私の戸惑いを知ってか知らずか、それを言い当ててみせたのである。

「それは・・・タイムマシンとかそれに類するものではないのか？」  
私は驚きのあまり口をアングリと開けたまま、彼の顔を凝視することになった。

(t o b e c o n t i n u e d . . . )



## ★ Chapter 7 ★

「タイムマシン・・・？」

そう言うのと紅莉栖は俺の目の前で黙りこんでしまった。  
う・・・。

沈黙が痛い。

ここしばらく非常識なことばかりあったせいで、感覚がマヒしてしまっていたが、大学生にもなって「タイムマシンがどうの」とか、いきなりマジ顔で言ってしまうのはやっぱり問題だっただろうか？  
恐る恐る紅莉栖の顔色を伺っていたが、しばらくすると彼女はこう返してきた。

「そう。タイムマシン・・・というか、時間を遡るような装置を作っていたような・・・いや、ほら夢だから。タイムマシンは科学者の夢っていうか・・・」

彼女も恥ずかしそうに言い淀んでいる。

「突飛な話ですみませんけど」

その後、居心地悪そうにそう付け加えてきた。

俺にとっては突飛ではない。

だが、紅莉栖の戸惑いは理解できる。

俺も言うのにかなり勇気が言ったくらいだからな。

彼女は俺が言い当てたような格好になったのが納得いかないようで、疑わしそうに俺を睨めつけてきた。

「・・・どうして、わかったんですか？」

そう聞いて来る。

「まだ誰にも話していない私の個人的な夢の内容なのに」  
俺としては困ってしまう。

「その記憶は、遠い宇宙の果て、または前世にまで・・・」

「そのネタはさっき聞きました」

だからあながち嘘ではないのだが。

・・・他にいったいどう言えというのだろう。

「私の父があの時持っていた私の論文の内容を見たのですか？」

「いや・・・知らないな」

あれがタイムマシンの論文だということは行きがかり上知っていたが、例え中身を見たとしても、内容が理解できたとは思えない。

「じゃあ、どうして、私のことを色々知っているんですか」

「知っている・・・？」

「そうです」

「ねらーで腐女子であることとかか？」

紅莉栖は顔を真赤にして感情を堪えていたが、今度は平静さを保つことに成功して、搾り出すようにこう言った。

「私はねらーだけど・・・腐女子・・・じゃない」

最後は消え入るようにそう付け加える。

「ふっ。そこは譲れない・・・と言うわけか」

「！」

・・・睨まれた。

「探偵・・・ではないですよ。超能力者でもないとする・・・ストーリー？」

「ストーリーなら夢の内容がわかるのか？」

「・・・」

しばし、二人共沈黙した。

どちらから先に秘密を話すのかという水面下の主導権争いのような

沈黙の後、紅莉栖は意を決したようにぽつりぽつりと話し始めた。

「7月28日にあなたに初めて出会った時を境にして、私は毎晩、不思議な夢をみるようになったんです・・・」

そこに割って入る。

「そこには、俺や、太ったオタクや、ちょっと変わった女が出てきて、日々訳のわからない研究に明け暮れていた・・・というのだろうか？」

「どうして・・・！」

紅莉栖が勇気を振り絞って、話してくれる気になったのだ。

俺も話さなければならぬだろう。

意を決して、こう切り出した。

「俺は・・・恐らくお前の見ていたその夢の世界から来たのだ」

(t o b e c o n t i n u e d . . . )

## ☆★ Chapter 8 ☆★

私の見ていた夢の世界から来た？

どうということだろう。

人の夢を渡り歩く装置なんて、タイムマシン以上に突飛で、それこそファンタジーかアニメの世界の話だろうし、目の前の彼が「俺は他人の夢を渡る能力を持っている」なんて言い出そうものなら、私はきつと「厨二病乙」の一言で済みますだろう。

しかし、実際に目の前の彼と話してみても、私の見てきた夢の内容と、彼が話す内容が驚くほど一致した後には、私自身それを認める他はないと言わざるを得なかった。

彼は、私に先に内容を話させて、その続きを話すような形で、内容の整合確認を図り、そしてそれはほとんどが合致していた。

それどころか、私の記憶が定かでは無いところまで、彼が話す内容は及んでおり、私の話に調子を合わせているのとは訳が違うことは明らかだった。

「それでは、本当にあなたは夢を渡ってきたと言うのですか？」

そして、私の顔色が疑いから驚きに変わり、おそろおそろ尋ねる私に、彼、岡部倫太郎は困ったように顔をしかめると、こう答えたのだった。

「正確には夢を・・・渡っているわけではないのだ。俺の主観からすれば、俺が経験してきた世界を、お前が夢に見ている・・・というか・・・」

頭がこんがりそうだ。

蝶になった夢を見て「どちらの自分が本当の自分だろうか」と起きた後に自問するようなものなのだろうか？

「いや、そういったものではない。そう言った抽象論ではないのだ」そう言って、続けて彼が話し始めた内容は驚くべきものだった。

メールを過去に送ることができる電子レンジ、人の記憶を電氣的に転送させることを応用したタイムリープ、それを使った世界改変、そしてアトラクターフィールド理論。

私は、タイムマシンの論文を書くために、その実現への下地である多次元世界観と基礎事象論に関しての知識は、既に頭に入っていたので、その彼の話が、理論的にあながち荒唐無稽ではないことは判断できたのだが、その全てを信じられるかと言われると、内容が内容だけにとっても即答で「全て信じる」と言い切ることはできなかった。

でも、今、私が抱えている「どこかで何かを知っている自分」と「過去の延長に囚われたままのその何かを知らない自分」の相克を解消する鍵は、この辺りにあるのではないかという感じがする。

もしそうだとしたら、こうして彼から、色々なことを聞くのは色々思い出すきっかけにはなるのかもしれないが、それだけでは下手をするとその『ふたつの自分』の相克が更に大きくなってしまう可能性がある。

日常を生きている顕在的存在の『私』自身がそれを体験して納得していかなければ、私はその相克を扱いきれずに引き裂かれてしまうのではないか。そんな気がした。

どうすれば、その間を埋めることができるだろう。

その為には受動的に話を聞くだけではなく、私自身が『体験』して、自発的に何かを感じなければならぬのではないか。

そうすると・・・やはり、それは・・・。

「私はやはりラボというその部屋に行ったほうがいいのかもしれません」

触発されるであろう色々なものを見て自分で体験する。

納得するにはそれしかない。

「うむ。観光目的ではないというのなら、有益かもしれんな。異論はない」

彼は二つ返事で同意してくれた。

「ありがとう・・・岡部・・・さん」

どう呼んだらいいのかわからず口ごもる。

「本当は鳳凰院凶真だっ！と言いたいところなのだがな。岡部と呼び捨てでいい」

その岡部は少し照れた後こう付け加えた。

「夢の中の・・・つまりα世界線のお前も・・・そう呼んでいたかな」

彼はそう言うとき赤くなった顔を隠すように背を向けて立ち上がった。このカフェの出口に向かってゆっくりと歩き出す。

そんな彼の後ろについて一緒に歩き出しながら、なんだかとても嬉しい気持ちの溢れたのは・・・岡部には内緒だ。

(to be continued・・・)

## ☆★ Chapter 9 ☆★

俺たちはメイド喫茶メイクイーンニャンニャンからゆっくりと歩いてラボに向かった。

ゆっくりと歩いたのは何も紅莉栖の歩幅に合わせた訳ではない。

どれくらい彼女がラボへの道順を覚えているのかに興味があったのだ。

わざわざ紅莉栖にそう言って意識的に歩いてもらったとしたら、きっと顕在意識が邪魔をして無意識に覚えているかもしれない道順もわからなくなってしまうのかもしれないが、こうして少しずつ歩調を緩めながら彼女をできるだけ先に誘導しないように気をつけて歩いてみると、やはりというか、彼女はあまり戸惑うこともなくすんなりとラボ方向についてきている感じがする。

ふむ、興味深い。

同じような理由で、あまりいろんな情報を紅莉栖に予め教えたりはしたくない。

彼女が「もう一人の自分」と言っていたそのインスピレーションというか、靈感のようなものに紅莉栖自身をノックさせたい。

それが俺の知っている『α世界線の紅莉栖』の意識かもしれないからな。

そうして俺たちはフラフラとブラウン管工房の前までやってきた。

「おう、岡部！」

FB・・・もとい、ミスターブラウンが声を掛けてくる。

「お前、まーた可愛い娘をナンパしてきやがったのか」

そんなことを言って絡んでくる。

「こないだうちのバイトに手を出したばかりじゃねーか」

手は出してないだろ。

まあ、ピンバッチは渡したが。

「彼女はそんなじゃないですよ」

また変に嗅ぎつけられてもかなわない。

少し嘘を言っても明確に否定しておこう。

「彼女は古い友人なんです。アメリカからちよつと帰ってきていて」  
本当のことも混ぜてそうごまかしておく。

口を挟まず黙って会釈する紅莉栖。

「なんだそうなのかよ。俺もフランスでずいぶんと暮らしたことがあつてな。しばらくぶりに日本に帰ると飯が上手いのよ、飯が」  
上機嫌なようである。

「そうですね」

紅莉栖は無難に返している。

俺たちは世間話をそれくらいで切り上げて、ラボのある二階へ上がろうと横にある階段へ向かう。

そこで、ブラウン管工房に入っていくミスターブラウンと入れ替わりに、萌郁が店の外に出てきてそつと俺たちに頭を下げた。

びっくりしたような素振りをする紅莉栖。

思わず身構えている。

そんな彼女を見て、最初は、ラウンダーに襲撃された時の記憶でも蘇ったのかと思ったのだが、話してみるとちよつと違うようである。

「なんだか因縁付けられるのかとおもっちゃった」

なるほど、そっちのほうか。

「どうしてそう思ったのだ？」

そう聞いてみる。



「え・・・どうしてだろ。前にそんなことがあったような気が・・・」  
俺は口元が緩むのを感じながら答えた。

「確かにここでいつもお前に絡んでくるブラウン管工場のバイトがいたな」

「やっぱりそうなんだ」

「ただ彼女・・・桐生萌郁ではない」  
俺はもったいぶりながら続けた。

「人違いだ。お前の夢の世界、つまりα世界線でお前に因縁をつけていたそいつは、ただのバイトではなくバイト戦士だったのだから」

ククク・・・と笑いを噛み殺す。

「桐生萌郁はバイト戦士ではない。彼女はシャイニングフィンガー、この世界線ではちょっと趣きが変わったがな」

何よりトレードマークの携帯電話を携帯していない。

「そのバイト戦士さんというのは？」

「この世界線ではまだ存在していない」

「それって・・・」

などと二人で話しているうちにラボの入り口に着いた。

紅莉栖は横で少し緊張気味である。

よし。今日はまゆりもダルも常駐しているはずだな。

そう頭の中で確認すると俺は颯爽とラボのドアを開いた。

「ラボメンの諸君！ 紹介しよう。ここに世界線を超えて約束されたラボメンナンバー004の到着であるっ！」

(to be continued・・・)

## ☆★ Chapter 10 ☆★

岡部がラボと呼んでいる一室に二人で入る。

大げさに声を張り上げて部屋に入る岡部。

中に入ると、部屋の入口付近にはテレビがあつて、その向かい側にソファ―。

奥はゴタゴタしている感じかな。

ソファ―に座っていた女の子が嬉しそうに顔を輝かせて声を上げた。

「おかりんー、オカエりん☆彡」

語尾にハートというか星というか何かそういうものが付いていそうな口調だ。

背は低めで丸顔。

目は大きくって可愛い感じ。

「あーお客さんだー」

子どもっぽい感じだが、わざとらしいような変な嫌らしさは感じない。

至って彼女らしい、そんな感じがする。

なんだか、懐かしいような気持ちが湧き上がるのだが、それがこの部屋なのか、この女の子なのかはイマイチ定かではない。

「こいつがラボメンナンバー1002、椎名まゆりだ」

岡部が女の子を紹介する。

彼女の満面の笑顔が、こんな岡部を快く思っていること、自分から好きでこのラボに出入りしていることを雄弁に語っていた。

「トゥットゥルー。まゆしいです。よろしくなのです☆彡」

なんだか挨拶が独特。  
面白い子だな。

「まゆり。彼女はラボメンナンバー1004。失われし神々の時代からの我が助手であり、アメリカ帰りの天才科学者でもある、クリスティーナだっ！」

なんだかあなたならこんな紹介をすと思ったわよ。  
まったく常識も何もあつたもんじゃないんだから。

そう思いながら、私は用意してきたようにツツコミを入れた。

「人を紹介する時くらい本名を言いなさいよ」

そして、改めて自己紹介する。

「こんにちは、椎名まゆりさん。私は牧瀬紅莉栖よ。岡部さんの助手でもクリスティーナでもないけど、アメリカで科学者をやってるっていうのは本当。まだタマゴだけどね」

そう、まゆりさんに話しかけている私を見ながら、岡部がニヤニヤと声を掛けてくる。

「なんだクリスティーナ。ニコニコじゃないか」

そう言われてみて初めて、私はびっくりするくらい自分が彼女をとっても優しい目で見つめていることに気がついた。

そうね、私は普段は正直、人見知りな方なんだけど彼女に対してはなんだか・・・。

「いや、なんだかね。彼女を見ると意味もなく嬉しいなって気持ちが高み上げてくるっていうか、何か、心からよかったなーって感じがするのよね・・・」

そうね、自分でもわからない。

でも、なんだか彼女も初めて会ったような気がしないのだ。

「それもまた、シュタインズゲートの選択なのだ」

岡部が、またも訳知り顔で頷き、上機嫌に首を上下させている。これにも何かあるのからしら。シュタインズゲートの選択・・・ねえ？

そんなことを3人で話していると、今度は部屋の奥からまるでトマトのような体型のオタクっぽい男がのっそりと出てきた。

「今、旬な話題を提供している牧瀬氏の話題と聞いて・・・」  
彼は私を見ると、すぐ知っているかのように驚いて、興奮気味にまくし立てた。

「おおっ！。まさかの本物キターッ！　なんで、今、@ちゃんで話題騒然な天才科学者、牧瀬氏とオカリンがツーショットなわけよ。何があったん？」

低い声で舌つ足らずな如何にもオタクですって感じのステレオタイプらしい。

私は実はこのテが苦手なはずなのだが、これも不思議と嫌悪感を感じない。

「話題騒然なのか？　クリスティーナが？」

岡部は知らないらしい。

あの件・・・か。

面倒なことにならないければいいけどな。

私は、ちよつと『あること』を思い出して心配になる。

「@ちゃんてちよつとした祭りなんだよ祭り。オカリンとまゆ氏が行った7月のラジ館でちよつとした目撃情報があつてだな」

やっぱり・・・か。

「なんかあの後あそこで警察が来る騒ぎがあつたらしいんだけどー。その前にドクター中鉢と牧瀬紅莉栖が密会？　っていうの？　人目を避けてコッソリ会ってるのを目撃した奴がいたらしいんだよね。そ

れで牧瀬氏が中鉢のことをそこで『パパ』と呼んでいたのを聞いたらしくて、中年デブ中鉢と天才少女科学者の援交キターって・・・」

「そうなのよね・・・。」

それで今朝もなんだか変な写真週刊誌のカメラマンに追いかけて、気持ち悪いから巻いているうちに岡部との約束の時間に遅れそうになったっていう・・・。」

「っていうか、その@ちゃんの祭り自体も、始まった時からバカなことやってんなーとか思いながら、私自身チェックしてたんだけど。その時は、まさか、こんなに大きな騒ぎなるなんて・・・ね。」

あの人、ロシアの入管で、揉めて、暴言吐いて、更に暴れて、タイーホ騒ぎにまで発展させちゃったらしいからなー。まったく、ほんとと、どこまでも迷惑な父親なんだから。」

「はあ。」

私は心の中でため息をついた。

(to be continued・・・)

## ☆★ Chapter 11 ☆★

「おいおい・・・」

俺は紅莉栖の横でポリポリと頭をかいた。

パパ・・・ね。

あの中鉢辺りなら、そう自分と呼ばせて金をばら撒いていそうではあるが・・・。

確かに、あの状況証拠だけから見れば援交の図かもな。

俺自身も、あの時、かなりびっくりしたのを思い出す。

まあ、パパと聞いて援交とは思わなかったが。

それにしても俺が影に隠れて、様子を伺っている時に通路の向こう側から、たまたま見ていた奴がいたんだな。

壁に耳あり障子に目ありって奴だ。

え？ お前が言うなって？

「なんか、その後、警察が中鉢を捜してたらしいんだけど、その件もからんでるんじゃないかって噂になっててさ・・・」

まあ、ものは取りようとは言うが、そう解釈することもできるわな。まったく『ねらー』たちの物語創作能力は大したものだよ。

しかし、真実は凡庸な小説よりも奇なのである。

俺は、真実を知る数少ない関係者として、感慨深い気持ちを感じながら、それでもそろそろダルの暴走を止めねばな・・・と思考を巡らせていると紅莉栖のほうが先手を打ったらしい。

「別に、それには直接からんでないわよ」  
きっぱりと言い切る。

「だってドクター中鉢は私の父だもの」  
速攻でバラしてしまう。

ちょっとネタとしては惜しい気もするが、紅莉栖は正に当事者なのだ。

早めに疑いは晴らしておかねばなんということか。

まあ、しょうがない。

「ええー！ー！ー！？？？？」

当然、ダルは両手を上げて驚きの声を挙げる。

「驚きの新事実！ー！ー！ー！」

そりゃそうだな。

ダルの話によると、どうやら牧瀬紅莉栖とロシアで捕まった中鉢の関係を詮索した記事が、今、夕刊紙やゴシップ誌に出まわっていてそれが話題になっているらしい。

一度火が点いてしまったら、ねらーも含めた『アイツら』はとことん詮索好きで、妄想癖全開だからな。

話をどんどん捏造してでも燃料投下をするだろう。

紅莉栖本人からしたら、完全に根も葉もない迷惑な話でしかないだろうがな。

まあ、ゴシップなんていつもそんなもんだ。

「岡部は・・・」

紅莉栖が聞いてくる。

「あの時に・・・初めて私と会った時に知ったのよね？」

「まあ、な」

そこら辺については正直あまり深く触れたくはない。

あの7月28日に、実際、裏で何があったかは、この紅莉栖にはやっぱりあまり知らせたくはなかった。

生真面目なヤツだからな。

色々と気を回されたくはないし、気を使わせたくはないのだ。

「パパ・・・か。とは言っても」

紅莉栖はかぶりを振った。

「・・・あの7月28日以来、もう、どうにもあの人を父親だとは思えなくなっているんだけどね」

紅莉栖はため息をつく。

実の父親とはいえ、あれだけ裏切られ、下手をすると殺されかけたんだ。

それも致し方ないだろう。

「そう言えば」

俺は話を変えることにした。

考えてみれば、まだ、ダルを紅莉栖に紹介もしていないじゃないか。「紹介がまだだったな。こいつはこのラボきつてのスーパーハカー。ラボメンナンバー003、俺のフェイバリットライトアームのダルだ」

と、俺がいつものようにそう紹介すると・・・。

「だから、人を紹介するなら、本名を先に言いなさいよ本名を！」

「スーパーハカーじゃなくてハッカーだったの！」

左右からステレオで文句を言われた。

「ダル君はねー、橋田至っていうんだよー」

まゆりが横から余計な口を挟んでくる。

・・・。

こんなちょっとしたやり取りからも、少しずつα世界線で知っていたラボの、いつもの情景が蘇ってきているような気がして、俺としては少し感慨深い気持ちを味わっていた。



(t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d.  
.  
)

## ☆★ Chapter 12 ☆★

「ダル君はねー、橋田至っていうんだよー」  
そうまゆりさんが教えてくれる。

橋田至ねー。

どうせ岡部がつけたんだろうけど、それでなんでニックネームがダ  
ルなのよ。

どうでもいいけどさ。

それにしても、このヒト達ったら。

岡部は横でうんうんと独りで悦に入ってるし、橋田は「ハッカーだ  
っちゅーの」って文句を言い続けてるし・・・。  
まったくみんな好き勝手放題ねー。

橋田の怒りもわかるけどさ。

スーパーハカーって、いつも都合よく出てくる「有能な俺の知り合  
い」を揶揄するための蔑称だもんね。

でも、そこはヒトの言うことを都合よくしか聞かない岡部のことだ。  
どうせ何度言っても修正しないんでしょ。

なんだか、もう、アイツの性格わかってきちゃった。

だけど、こういうちよつと好き勝手な、周りのことをあんまり考え  
なくても、自分を抑えなくてもいいような空気っていいな。

そんな彼らに少し居心地のよさを感じてしまう。

ひとりひとりを見回すと、なんだかやっぱり不思議と悪い気がしな  
い。

さて、と。

じゃあ、今度こそ、この部屋の中にいるのは、私を含めてこの4人

だね。

この部屋に入ってきてからいきなりバタバタしていた心に区切りをつける。

それにしても……。

私は部屋を見渡す。

「けっこう、いいところじゃない」

それは素直な感想。

「そうなんだよー。奥にはシャワーもあるし、キッチンもついてるし」

まゆりさんが嬉しそうに、そう説明してくれる。

シャワー……ね。

なんだか、あんまり考えたくない感じ。

「まゆりッ、我がラボの秘密をそうヤスヤスと漏らすとは……」  
とか岡部が云々言ってるけど無視することにする。

この汚い部屋がラボ（研究室）ねー。

まあ、そういう粋がった思い入れの込められたネーミングは嫌いじゃないけどね。

科学者たるもの、いつも研究対象をとことん愛して、細部までコダワリ続けなければ、物事の真実は見えてこない。

そういうものだと思うし。

確かに……夢の中に出てきたのもこんな部屋だったような……。

そう思いながら奥に入っていく。

「ちよっと奥を見せてもらっていい？」

「ああ。いいだろう」

岡部の返事を待たずに奥の、暗くて、更に乱雑に色々なものが散らかっている領域に足を踏み入れる。

まず目に入っただのは電子レンジ。

んー何か引つかかると言えば引つかかるんだけど・・・。

「大体、なんで電子レンジが、こんなに奥の使うのに不便なところにあるのよ」

素朴な疑問。

引つかかっているところはそういう所じゃない気もするんだけど。

「それは伝統である」

とは岡部の言。

「オカリンオカリン、このラボは今年の春からの出発だから、伝統っていうほど長い時間は経ってないんじゃないかなー」とは、まゆりさん。

「だいたい、これはオカリンが電話レンジの実験をするために、ここに移動してからだから、今年の7月くらいからでね？」

橋田もそんなことを言っている。

電子レンジで・・・何か実験をしていたのか・・・。

電話レンジ・・・ねえ。

何か・・・引つかかる。

引つかかるのよね。

電話と電子レンジなんて、その二つにいったい何の関連性が・・・。

なんて考えていると、急に気持ちが悪くなってくる。

まずい。

これは最近よく来る貧血の兆候だ。

なんだか目眩が・・・。

「おい、大丈夫か？ クリスティーナ！」

岡部が駆け寄ってくる。

駆け寄ってきたからって、どうせ私を心配してじゃないんでしょ・・・。

あれ・・・私・・・何を・・・考えて・・・。

だんだん、思考が混濁してきて、私は重度の目眩でまっすぐ立って  
いられなくなり、その場に倒れ込んだ。

(t o b e c o n t i n u e d . . . )

## ☆★ Chapter 13 ☆★

私はあのまま気を失っちゃったんだろうか……。

自分が上を向いているのか下を向いているのかもわからないような感じ。

まるで無重力の中を漂っているような。

そして、混濁していた意識に少しずつピントが合ってくると、今度はどこかから声が聞こえてきた。

「どうして、一緒に来てくれないんだっ！ 紅莉栖ッ！！」

あ……れ……？

私、どこにいるんだろ。

ここは？

「言ったでしょ、私はもう貴方には興味が無いって」

あれは……私？

「なぜだ、俺はお前の為に……」

これは岡部……だ。

ここは……どこかの研究施設？

「私の為にまゆりを犠牲にした岡部倫太郎。貴方にはその称号がお似合いだわ。ともかく貴方達には私の研究の邪魔はさせない」

凄い形相で岡部を睨んでいる。

まゆりさんを犠牲にした？

どういうことだろ。

「行くんなら早く行っちゃいなさい。ただし貴方達だけでね。もう私の前に顔を見せないで。私の邪魔をしないのなら逃走経路は一応確保しておいてあげるわ」

一呼吸置いてこう続ける。

「これ以上邪魔をするなら、殺しちゃうから！」  
背筋が寒くなるようなことを平然と言つてのける。

「オカリン、もう状況的にやばいんでね？　こうなったら牧瀬氏は諦めるしかないと思われ」

あ、橋田もいたみたい。

あれ、まゆりさんは？

というか、ここはあの汚い一室のラボじゃなくて、本当はかなり大規模な研究施設のような感じだけど。

「くそつ。紅莉栖。また必ず助けにくる。必ずだ」  
そういう岡部に、彼の前にいる彼女は即答で応える。

「二度と来なくていいわ。自分の本分を全うしなさい。それに私はずっと言ってるけどα世界線に残った貴方には全く興味が無いの。もう私の前に顔を見せないで」

情け容赦ない言葉を矢継ぎ早に浴びせる。

そして最後に。

「今度、私の研究の邪魔をしたら・・・殺すからねっ！」  
トドメとばかりに言い放つと、岡部は悔しそうに、橋田はのそのそと、足早にその場を去った。

静かになった室内には彼女だけが残され・・・。

あれ、私は宙に浮いてる感じなのかな。

これからどうしたらいいんだろう・・・とキョロキョロしていると、白衣を来た私はツカツカと私の正面まで歩いてきて、当然のように話しかけてきた。

「待たせちゃったみたいね」

その声は、さっきまでとは別人のように優しい声だった。

「びっくりさせてしまつてごめんなさいね。ここはα世界線……  
って言つても貴方には、まだ、わからないか。貴方のいる可能性世  
界とは違う世界。時間軸的には貴方からは2年ほど未来に当たる2  
012年よ」

え……？

何を言っているの？

「今はわからなくてもいいから聞いておいてくれる？」

目の前にいる自称『未来の私』は、そう前置きをすると、話につい  
てこれない私をそっちのけで話し始めた。

「私は2012年現在、このSERNの施設で、ある研究に没頭し  
ている。タイムマシン研究というのは囿よ。その研究とはヒトの意  
識、つまり情報だけでなく意志までを電子化して、過去や未来に送  
るという技術の開発」

何を言っているか、さっぱり分からない……SERN？

「この研究が成功すれば、Dメールの不完全な特性である『情報を  
送つてもそれをどう判断するかは相手に委ねられる』という弱点を  
解消することが可能になる」

さっぱり訳がわからない。

「私は気がついたのよ。アトラクタフィールドの壁に縛られるのは  
肉体だけだ。『心』と言われる意識を格納した本質的なエネルギー  
ー波動は、同一個体の場合シームレスに繋がっているって。そして、  
その研究を続ける為には、このSERNの巨大な研究機関と、大規  
模な施設が必要だと言うわけなの」

ああ、それでさっき岡部達と一緒に行かなかったのね。

「それは半分だけ正解。今の私って、本当にもうこのα世界線の彼  
らには興味がないのよ……」

自嘲気味にそう言う。



じゃあ、どうして私はここに居るの？

「私が呼び出したからよ。変性意識状態の自分の意識は、別の世界からの情報を受け取りやすくなる。それは古くから経験的に知られていることよ。それを利用して・・・」

そこで室内にアラームが鳴った。

「セキュリティアラート・・・！」

目の前の紅莉栖が舌打ちをする。

「あいつら・・・ヘマったな？ 私の研究の邪魔をするなどあればと言ったのにッ！」

そう憎々しげに呟くと私の方に向き直った。

言葉が早口になる。

「セキュリティアラートが発動したから、もうすぐLHCが緊急停止してしまう。貴方の意識は元の世界に戻るわ。覚えておいて。貴方の世界で貴方自身が得る情報は、私からも観測できる。そして、とても重要なものの。他からの介入が入らないからね。貴方に頼みがあるのよ」

頼み？ 貴方が私に？

「そう。今、オフアールが来ているアリゾナ州大学工学部からの共同研究の依頼を受けて欲しいの」

あの大学院の生物工学部門からの？

「ええ。そこで研究する情報が私のこれからの研究に必要なのよ。あ、それから、この話はそっちの岡部にはまだ言わないで。世界線がどう変動するか計算できていな・・・」

ザーーーーーーーーーーーーーーーーー。

いきなり目の前が真っ白になる。

意識が再び混濁した。

(t o b e c o n t i n u e d . . . )

## ☆★ Chapter 14 ☆★

また意識が何処かに向かって自由落下している感じ。

その中で、色々な事象の色々な場面に、ピントが合っては、また離れていく・・・。

~~~~~

・  
・  
・

俺はまゆりも・・・紅莉栖も・・・救えなかった。  
おれはッ・・・！

それが思い上がりだっていうのよ。

誰もあんたに救われるために生きてるんじゃないっ！！

・  
・  
・

ありがとう紅莉栖。

これでやっと、シュタインズゲート世界線の正確なダイバージェンス値が算出できる。

ここでもこんな形で、また最後にお前に助けられることになるうとはな・・・！

よし、俺はこれからいよいよ最後のムービーメールの制作に着手する。

オペレーションスクルド最終段階だッ！

・  
・

・  
α世界線の私は今までずっとこの研究に全てを捧げてきた。  
その最後の希望をこんな形で終わらせはしない！

・  
橋田が、コンピューターネットワークをハッキングするハッカーなら  
私は、神の作った意識のネットワークをハッキングする科学者とい  
うわけなの。

(H a c k i n g   t o   t h e   G o d ' s   G a t e )

・  
・  
お前は紅莉栖・・・俺の知っている『あの』紅莉栖なのか？

・  
・  
俺はイカレテなどいない！ 至って正常だ。

ここでは真実を語っているのであって、断じて厨二病の妄想なんか  
じゃない！

・  
・  
でも、ダメだったの・・・神のセキュリティは破れなかったのよ・・・

・  
・  
誰を助けて、誰を見殺しにするかなんて、俺は・・・もう、決めら  
れないッ！！

・ ・ ・  
ねえ、岡部。相対性理論って、とってもロマンチックで――  
――とても、切ないものだね・・・。

・ ・ ・  
相対的判断なんてクソ食らえだッ！

・ ・ ・  
岡部は私のこと、覚えてて・・・くれる？

・ ・ ・

~~~~~

自由落下は最後に何かに突き当たり、肉体の中に意識が格納された  
感触がして、最後にピントがしっかりと合った。  
戻ってきた。

だけど――。

私はどうやらラボのソファ―に仰向けになって寝ているみたいだ。  
周りにみんながいる気配がする。

騒がしい声が次第にはっきりと聞こえてくる。

「紅莉栖・・・しっかりしろっ、紅莉栖ッ！」

岡部が私をちゃんと名前で紅莉栖って呼んでる・・・珍しいな。

「紅莉栖ちゃん、死なないでー」

まゆりちゃんったら。

勝手に殺さないでよ・・・。

「牧瀬氏が仰向けになっても、かなりのナイチチである件について」  
橋田・・・あんた、後で絶対殺す。

――戻ってきたのね、私。

けれども、もう以前の私にはきつと戻れない・・・。  
そんな気がした。

心のなかには大きな喪失感がある。  
ぽっかりと大きく空いた穴。

不意に涙が零れた。

「紅莉栖・・・気がついたか！」

岡部の声が明るく弾ける。

「お・・・かべ・・・」

どんな顔をして目を開けたらいいのかわからない。

そして、これからどうすればいいのかも・・・。

「私・・・なんだか、とても大切なものを・・・忘れちゃいけない  
本当に大事なことを、たくさん忘れてしまっているような・・・気が  
する・・・」

そう言ったきり、私は声を殺して泣きじゃくった。

(to be continued・・・)

## ☆★ Chapter 15 ☆★

「アリゾナ？」

俺は思わず聞き返した。

「それってー日本人によく似たエスキモーの人達がいる・・・」

「それはアラスカよ、まゆりさん」

「えっへへー」

まゆりの場合は何処までがギャグでどこまでが本気か全くわからない。

「俺は、密林の中にでっかい川が流れているイメージがあるんだが・

・・・」

どうも地理はわからん。

「それはイワユル、ネット書店なのでわー」

そう突っ込むダルに紅莉栖が一睨み。

「橋田。あんたワザと言ってるでしょ」

・ ・ ・

紅莉栖は、ラボの奥を見に行った後、電子レンジの前で倒れ、ソファーまで移動させて寝かせたところで意識を取り戻した。

奥の部屋を見て、何かを思い出したのか、彼女の心の中で何があったのか、正直俺にはわからない。

彼女は気がついた後、急に大粒の涙を止め処なく零すと、しばらくして落ち着いたあと、いきなりこんなことを言い出したのだ。

「アリゾナ州大学よ。その生物工学部門から共同研究に誘われるの。夏のバカンスの前からね。色々あったんで、ちょっと返事が延び延びになっちゃってただんだけど・・・」

気持ちを切り替えた紅莉栖はまるで別人のように朗らかだ。

それを聞いて、俺は考えたくなかった現実には直面して、逆に鬱になる。

「アメリカに・・・帰るんだよな・・・」

そりゃそうだ。

それはα世界線の紅莉栖だってそう言っていたし、家だってあっちにあるんだ。彼女が生きているのなら、当然向こうがホームタウンになるだろう。

そして・・・父親との縁も切れたとなると・・・もう。

一度、紅莉栖の事は諦めようと心の整理はついていたはずなのに、こうして会って色々と話してしまうと、やっぱり辛い。

「そうね。早い内に荷物をまとめてアリゾナに行っちゃうことにするわ」

早い内にか・・・お前は日本であった色々な嫌なこと全部忘れることにして、頭を切り替えることに決めたということなのか。

「そうか・・・お前は引く手あまたな有能な脳科学者だもん・・・」

俺はため息をついた。

「早めに動いて、研究所員との顔合わせや、研究の初期段階を終わらせておかないと、クリスマスの頃に日本に帰ってくることができなくなるでしょ？」

「え・・・？」



それって・・・。

「お前、まだ父親に会いに帰ってくるのか？」

俺は素っ頓狂な声を上げてしまう。

「父親はタイーホされちゃってます。それに私はもうあの人に自分から会いにいくことはきつとないわ」

「じゃあ・・・なんで日本に？」

思わず聞いてしまう。

「何よ。家族絡みじゃなきゃ帰ってきちゃいけないの？」

紅莉栖は口を尖らせるとこう付け加えた。

「このラボは年末までには潰れちゃう運びなのかしらねー」

俺は地獄で仏を見たような表情になる。

「そ、そんなことはない。このラボは不滅なのだ。いつまでも変わらない」

「部外者はお断り？」

いたずらっぽくウインクしてくるクリスティーナ。

「お、お前は・・・部外者じゃないだろう。世界で8つしか無いピンバッチを与えたからには・・・どの世界線でもお前は俺の助手であり・・・！」

顔が紅潮する。

「わー！ 紅莉栖ちゃんならいつでも大歓迎だよー。嬉しいなー」  
はしゃぐまゆり。

「牧瀬氏がラボに来るということは、このラボがツンデレ貧乳属性を備えた、より完全な状態に近づくということであり・・・それはいわゆるグレードアップだと考えてもいいと思われ。そしていつの日かフェイリスたんもその中に加えて更なる完全体に・・・ぐへ、ぐへへ」

「気持ち悪いわよ、このHENTAI。こっち見んな！」  
ダルの奴も異論はなさそうだな。

「我がラボは未来永劫この場所に君臨するのだ。世界の支配構造を  
変革する前も、そして後もだ。いつでもこのラボに立ち寄るがよい、  
クリスティーナよっ！　ここはお前の家も同然！　故郷も同然の場  
所なのだからなっ。フウッハッハッハッ！！」  
俺は上機嫌に高笑いをあげた。

(t o b e c o n t i n u e d . . . )

☆☆ エピローグ ☆☆

♪ 夢を紡いた 時の誘惑 ♪

「じゃ、行って来るね。みんな」

紅莉栖が俺達に向かって微笑んだ。

搭乗口に向かって歩きながら何度も振り返る。

「紅莉栖ちゃん元気だねー」

「牧瀬氏乙っす」

こんな光景は他の世界線ではなかったよな。

いつも、こうやって別れる時は、アイツは一人で……。

♪ 嵐の後の 青空が沁みる ♪

私がパパラッチに追いかけられた話をする、ラボのみんなが空港までついてきてくれることになった。

予想外に賑やかな出発になったな。

――はしゃぎ気味のみんなの中で、岡部がちょっと寂しそうな感じ。それが少し嬉しいと感じてしまう私がいる。

「岡部っ！」

俯いていつまでも目を合わせようとしないう岡部に私から声をかける。

♪ 幸せになぜ 隠れているの？ ♪

不意に紅莉栖に呼ばれて、自分がずっと下を向いていたことに気がついた。

顔を上げる。

「また連絡するけどいい？」

そう言ってくれる。

「もちろんだ。俺も・・・俺はいつもお前の事を・・・」  
ゴウーーーーッ。  
轟音が俺の声をかき消す。

♪ 悲しみの種 僕らを試すよ ♪

岡部が何か言おうとしていた。  
でも、その時に着陸する飛行機の音がかぶさって・・・。

「なに？ 聞こえなかった」  
聞き返す。

「・・・。んっんっ！」

岡部は咳払いをすると。

「ラボメンナンバー004、クリステイナよ！ 俺はいつでも自らのラボのラボメンのことを気にかけている！ 遠慮無く何でも相談してこいっ！ フウッハッハッハッハ！！」  
は・・・恥ずかしい。  
やっぱり連れてくるんじゃないかったか。

♪ すれ違う優しさ 持て余し ♪

紅莉栖が搭乗口に消えていく。  
俺たちは急いで搭乗デッキから、更に彼女が乗った飛行機を見送る為に表に移動する。

「ばんざーい、ばんざーい」

ダルが横でまったく意味不明のパフォーマンスを繰り広げている。  
まゆりの奴も、わからない癖に飛び跳ねながら一緒にバンザイを繰り返す。

なんだかな。

俺は、どんな顔をしていいかわからず腕を組みながら・・・仁王立ちを演じていた。

そこで俺の携帯が鳴った。

♪ 夜の 闇に震えてた 〽

メールだ。

「連絡待ってるから」

短い文面と共に国際携帯の番号が添えられていた。

「俺に携帯代を払えというのか・・・やれやれ」

口元が緩むのを堪えながら独りごちた。

・・・っていうかお前、離陸直前の機内で携帯使うのは反則だろ。

♪ 遠回りした 道で氣づいた 〽

♪ Attention! Please don't use  
our cellphone at the cabin! 〽

(機内では携帯電話のご使用はご遠慮下さい)

ちよつといらついた感じのパーサーのアナウンスがある。

やばっ・・・やっぱりバレたか。

でも、岡部がウジウジしていたせいで伝え忘れたんだもの。  
しょうがないじゃない。

♪ 失くせない ものがなんだか 〽

飛行機が離陸して行った。

でも、きっと俺たちの絆は繋がった。

そう信じたい。

♪ せつなさを超えて いま呼び合う瞳 〽

また、もう一度、ここで紅莉栖と会える日が来る。

俺たちの運命はまた交わってくる。  
そんな世界線であってほしい。  
心の中で、そう願った。

♪ 運命が見つけた絆 〵

巡航状態に入ると時差の調整もあって、機内では私は眠ることにしている。

最近、色々なことがあって、不安なことも多いけど眠ることにする。  
そして、やっぱり思っていた通り、私は夢を見た。  
夢の中では、またこの間会った未来の私がいた。

♪ 壊れそうなもの 溢れてる世界で 〵

彼女が言う。

「貴方の運命はたくさんさんの必然を満たすことで生まれた可能性」  
「シュタインズゲートの世界線は、他の世界線の必要性を全て満たしているからこそ、どこからも無介入の無謬性を保っているのよ」  
そう言っていた。

♪ 永遠と呼びたい 君に 〵

その意味は、まだ今の私にはわからなかったけれど、きっと色々な可能性の自分が不可分で、無関係なものではないのだと。

今の自分の意志を、自由を守るためには、きっと、存在するたくさん  
の世界線の必要性を満たす必要があるのかもしれない、と。  
理解しつつはあったのだ。

♪ 出逢えた ことだけは 〵

それが、私がここにいる不思議。  
その奇跡を守る、唯一の方法なのだから。

< F I N >

※※※ あとがき ※※※

あとがきです。

今回の「日常回帰のアナザーヘブン」はこれで終了です。

当初から、シュタインズゲート世界線で紅莉栖と会ってから、一度アメリカに帰るまでを描こうと思っていましたからね。

計画通りです。

でも、こうなんというか、消化不良な感じが残ったかなーという手応えが残ったのは、後半になって次のお話の断片が入ったからでしょうか。

私の中では、こうして、シュタインズゲートの世界線での話の設計図を引いている間に、色々な話が自分なりに繋がってしまい、更に大きな設計図が引かれてしまったような感じ。

それを少し見せておきたいなーと思い、この後半のような進行になりました。

公式に、 $\alpha$ 世界線や $\beta$ 世界線の未来は大まかには決まっているわけですが、それを最低限踏襲しながらオリジナルのエピソードを描く・ $\gamma$ 年表が決まっているところから、ディテールを描く時にその描き方によって色々な変化を付けるファイブスターのようなイメージですかね。(いやいや、私なんぞに永野さんほどの物語構築能力があるわけじゃないですから、引き合いに出すのは失礼かもしれませんが・ $\gamma$ あくまでイメージ的にということです)

$\alpha$ 世界線の紅莉栖の運命も過酷ですが、 $\beta$ 世界線でシュタインズゲート世界線到達を模索するオカリンも、かなり過酷な運命だと思うんです。

それゆえ、この二人は補完関係なのではないか、という仮説です。



オカリンは工学系の人間ですから、できたものを形にすることは得意ですが、基礎理論を構築して、いわゆる『謎を解く』ことは苦手になっています。

ですから、β世界線のオカリンはシュタインズゲート世界線到達への最後の詰めで行き詰ってしまう。

それを何らかの手段で感知することができたα世界線の紅莉栖は、なんとか彼を助けるために奮闘する、というわけです。

とまあ、細かいことはさておき。

シュタゲのムービー関係はどれも神MADクラスだと個人的には思うのですが、その中でもとりわけOPを初めて見た時の衝撃は忘れられません。Open the Eye♪で白黒の紅莉栖の目がクルクルと色が変わり、人工衛星が落ちてくるところからの展開が好きで好きで・・・もう、あの時から紅莉栖の虜でした。

最後まで取り憑かれたようにゲームを解き、今時珍しい演出だけでなく結末まで大満足の素晴らしいゲームで、大満足だったのですが、それは間違いないんですが・・・。

正直な感想として残ったのは『もっと紅莉栖が活躍する話なのかと思った』でした。

それほど、私にとってはOPの紅莉栖が衝撃的過ぎたということなんでしょうけどね。

十分活躍したじゃないかいう声もあると思いますが、個人的には、彼女は終盤助けられる側にまわってしまうだけに、どうしても受身になってしまい、ラストシーンで『可愛い女の子』というイメージが非常に強調されて終わってしまった、と思っています。

ゲームが売れるためには、それは必要なことだったのかもしれないが、『可愛い女の子<頭のいい女の子>』な私にとっては、それが

どうしても物足りなさとして残ってしまったんですね(汗)

もっともっと紅莉栖が『科学者として』大活躍する話にならなかったのか？

それが、今の私の創作意欲になっているような気がします。

あ・・・あとがきが何か長くなってしまった。

そんな訳で、「日常回帰のアナザーヘブン」はこれで終わりですが、お話は続きます。

続く・・・はずです(汗)

次は恐らくα世界線の紅莉栖(世界線を繋ぐピンクの糸の後の彼女ですね)にフォーカスした話になるのではないかなと思っています。題名は『無限改軌のディストピア』

そういう話になる・・・いや、あくまで予定です。

ディストピア世界で悪者になりながらも独り奮闘する彼女を見守ってやりたいじゃないですか。

という訳で、ご興味があるかたはどうぞご期待下さいませ。

それでは、短くない文章に、最後までお付き合い頂き、本当にありがとうございます。

(2011. 11. 14 21:59 おるによん)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0039y/>

---

日常回帰のアナザーヘブン

2011年11月15日12時18分発行